

邑久光明園人権擁護委員会 検証報告書のポイント

実態

入所者の遺体の解剖率は1938～98年で7割に上り、100%の年も9回あった

意義

解剖で得られた知見は1950年ごろまでは病態の解明に貢献したが、それ以降、多くの遺体を解剖する必要性は失われていた

同意

入所者は解剖を受け入れざるを得ない状況で、正当な同意とは見なせない